

蝶々夫人は幸せになりえたのか

生命科学科 1年 K. G.

オペラ『蝶々夫人』第2幕にて、ピンカートンとの結婚式の3年後、実質的に彼に捨てられた蝶々夫人は、裕福な紳士ヤマドリ公から求婚を受ける。しかし、ピンカートンを信じる蝶々夫人は求婚を断る。その後、続く第3幕で彼女はピンカートンが帰国後にアメリカで結婚していたという事実を知り、ピンカートンとの息子をこの夫婦に渡すことを受け入れ、父親の短剣で自害して終幕となる。

蝶々夫人はピンカートンの裏切りを知り、第3幕の最後に自害した。その前の第2幕で、蝶々夫人がピンカートンを裏切り幸せを手に入れる可能性はあったのだろうか。つまり、蝶々夫人はヤマドリ公の求婚を受け入れ、幸せを手に入れる可能性はあったのかについて、考えていく。

ヤマドリ公が求婚をしたあの場面の時点で、蝶々夫人は財政的に苦しくなっていた。また、地元での人間関係でも孤立気味であったと考えられる。第1幕の蝶々夫人とピンカートンとの結婚式に来た彼女の友人らは、彼女の改宗を理由に絶縁を宣言しに来たボンゾと共に去って行ってしまった。また、第2幕終盤、ピンカートンの所属艦アブラハム・リンカーン号の到来を確認した際には、船に集まる長崎の人々を指して、『みな私の不幸を嘲笑していた人』『情け知らず』とっていて、○ここからも長崎の人々から蝶々夫人が孤立していたことが伺える。○ピンカートンの残した金は少なくなっていたが、ボンゾら親族との絶縁状態、周囲からの孤立のために誰かに頼ることもできない。そのような余裕のない状態だったため、蝶々夫人はピンカートンの帰りを信じ、精神的な拠りどころにせざるをえなかったのだろう。さらに、最初二人は愛し合っていたし、ピンカートンはアメリカ領事のシャープレスを結婚式に招いていた。これらは異例なことで、蝶々夫人が、自分はラシャメンとよばれる現地妻らとは違う、ピンカートンは帰ってくる、と盲信できる下地ができていた。だから、彼女はシャープレスが『ピンカートンが帰ってこなければどうするのか』と質問するまで、病的に帰ってくることを信じていたし、第3幕でピンカートン夫妻とシャープレスが子供を渡すよう説得しに来た時も、そのことを『何もかも取り上げる』と表現しつつも、『あの方に従わなければ』と言う。

この時代の日本では三従という教えが強かった。これは、女性は生家では父親に、結婚してからは夫に、夫の死後は子供に従うという教えである。蝶々夫人がこの教えに従うこと自体は不自然ではない。○だが、蝶々夫人は自分を捨てたとわかったピンカートンに対しても、妻としての立場で振る舞った。彼女の暮らしが彼に依存していたためだ。生活資

金面の依存はもちろん、○孤立した環境で彼の帰りを心の拠りどころにしたために、彼女は事実を知っても他人として振る舞えなかった。

このような状態だったから、蝶々夫人がヤマドリ公の求婚を受け入れ幸せになることは不可能だ。もし、蝶々夫人が改宗せず、ボンゾに絶縁されることがなければ、周囲から孤立せず親戚に頼ることができ、相対的に蝶々夫人へのピンカートンの影響が小さくなっただろう。その状態であったら、蝶々夫人はヤマドリ公の求婚を受け入れ、幸せになれたかもしれない。

*日本語はしっかりしている。

*別のレポートに、ヤマドリ公と結婚していたら〜というものがあつた。

それに触発されてボクが推測すると、ヤマドリ公が蝶々さんの子供を自分の子として育てていたら、ピンカートン夫妻に渡すことにはならなかったろう。ただしすでに多くの女性を囲っていたらしいヤマドリ公なので、いずれ蝶々さんとの関係も破綻するであろう。

——やはり台本はうまく書けている、と感心します。